

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成17年3月号

平成十七年三月一日発行 第十五巻第三号 通巻第一六五号 毎月一回一日発行  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 去年今年

高橋将夫

ゆく年の人のぶつかる曲り角  
大年の相照らしあふ灯かな  
手料理の味はさらりと去年今年  
首をもて鶴の一声明けにけり

四枚のエースがそろひ初御空  
笛の穴今年の指で押さへをり  
鷹のまばたき達磨さんがころんだ  
高ければ高いほどよき冬の波  
かうしてる間も氷柱長くなり  
狐火の考へて出るものでなし  
とこしへの赤ここにあり  
方<sup>かな</sup>頭<sup>がし</sup>魚<sup>ら</sup>

# 梅 見 月

鈴木勢津子

捨てがたきもの身ほとりに去年今年  
親と子の力競べよ福寿草  
雑煮食べマリアの像に会ひゆけり  
悠然と雫のありし淑気かな  
梅見月寂しきときを持て余す  
青梅となりたる庭の菊化石  
草山に馬放ちけり雲の峰  
月星の日周運動十二月  
法螺貝の響動し谷の万燈会  
冬の日の身を削りたる雲残す

特別作品

金星の最大離角 冬木立  
川肌の丸つと見えし冬の川  
二千人の天突き体操霰ふる  
昂然と白息空へ消ゆるのみ  
今昔の雪嶺に神宿るなり  
冬將軍の鶴翼の陣構へたり  
山壁の深さ親しき寒椿  
これが花枇杷の柔毛にこげのさみどりに  
寒紅や不思議でありし蘭の舌ぜう  
白紙の山越えてゆく鬼やらひ

# 槐安集

市場基巳

秋の鵜にゆふみずもやのひろがり来  
目に見へぬ亀の居さうな冬隣  
蝶蝶のいのちまだあり秋の駅  
うしろから雨ついてくる十一月  
穴に入る蛇恋ふ古稀を過ぎたれば

水野恒彦

冬蝶の匂ひ消えたる顎かな  
霜柱これ母の骨くれなゐに  
降るときも日の差すときも藪柑子  
烏淋し崖が応へてくれにけり  
火柱もの立ち上る十二月



石脇みはる

釈尊や二股大根そぎ落す  
元旦や湖の真中の涅槃像  
雲腸を食すや髯面赤ら顔  
橙や大甕に水汲み置きす  
舷に牡蠣うちあげし飛沫かな

竹内悦子

らくだ色したる枯山屋の経  
太陽の沈むはまぶし冬帽子  
烏打帽かぶりて夜の葱畑  
囲炉裏に炎あがり雉子の清し汁  
石路明かりして真夜中の傀儡かな

木下野生

薬喰となりの部屋のほの明り  
履物の爪先そろひ薬喰  
そこへゆく道のありけり冬木立  
梟やとしより行方不明とか  
俎板に大きな魚冬の暮

延広禎一

新巻や墨痕太き千社札  
白山の雲ほぐれたり蕪鮓  
風紋は蹄のかたち神の旅  
潮暦と絵心経ある小春かな  
葉牡丹の渦と絵解説法と

中島陽華

冬の日やもんどりに鯉入りにける  
蠟月の夜の狩衣の越天楽  
大祥やひとつ穴ある北寄貝  
師の在すかに酒を酌みクリスマス  
苔枕投げ先斗町明けの春

栗栖恵通子

けあらしやくつついている紙コップ  
波の秀の善がりて龍のわたりかな  
龍のわたりは七福神の群  
胎動の波の来てをり七福神  
雪女郎いくたび赤き実を食むも  
大日や凍滝の梯ありにける

加藤 みき

大岩にあがる白波熨斗鮑  
朽葉動き此処に宮川はじまりぬ  
白紙に刃を入れて春仕度  
玉椿を一枝活けし柱かな  
マニキュアの爪に星空降誕祭

大島 翠木

耳しひの吾に桜の冬木かな  
雪虫の滑りて消ゆる金毛閣  
時雨来て光悦垣に止みにけり  
冬麗の遺跡ひびかせ杭を打つ  
晩年は冬満月のしづくかな

雨村 敏子

春日野に鹿眠るらし星明り  
月山の山懷やちやんちやんこ  
傀儡師塩壺に塩足してをる  
金糸魚の鱗の四角寒夕焼  
年の夜の花咲蟹の泡かな



# 槐市集

秋岡朝子

夕焚火まだ燃えしづるものあり  
冬の蝶何もつかんでをらぬなり  
しぐるるや陶の狸が酒買ひに  
おだやかな日射しが膝に大師講  
干布団軽さといふは淋しけれ

天野きく江

水仙のかほりて背筋あたたまる  
喜こんで茶の花人を恋ひにけり  
耳さときこと面白し竜の玉  
聖夜かなはらからとして茶を汲まむ  
黒松の太き幹なり冬銀河



岩月優美子

冬夕焼ムンクは何を叫びたる  
冬星の一つ動きてバツハかな  
枯蔓を引けば海光広がり  
ゴスペルや水面に揺るる冬の月  
夢の橋渡る途中の去年今年

岩下芳子

柚子湯立ててやがてニンフとなりけり  
冬空へ長き手唯我独尊図  
ほめ言葉ばかり聞きたし耳袋  
茶の花の蕊をつまみし粘りかな  
足もとに狸々木の緋のひかり

# 槐集

## 高橋将夫選

緩みたる闇のスクラム冬の雷

岡崎

近藤 喜子

うるめ焼くプロメテウスの授けし火

エッシャーの空より来たる冬の雁

白ふくろふ精霊ことごとく見ゆる

霜のこ糸闇のかすかに動きけり

さうさうと日ののぼりくる冬の海

枚方

谷口佳世子

海底をのぞいてゐたる師走かな

さかさまに冬の海月のまくれなぬ

十二月九絵をつついてをりにけり

玄冬やラ・カンパネラ弾き終る

水鳥をみつめてゐたる埴輪かな

小春日の瞬に笑ひごゑのあり

冬の虹生駒断層目覚むるか

雨戸繰る冬霧すつと身をつつみ

比良に雪磨きあげたる鏡かな

近藤きくえ

法の山雲放ちたる蕪かな

岡崎

本多 俊子

寒声や槐の洞にとどきたり

孔雀鳴く冬日の匂ひ焦げくさし

鬼ゆず湯五体ほぐしてをりにけり

縞ふくろふところ深く啼きにけり

門先に獣皮干しある十二月

岩月優美子

枯芦の高さに夕日ありにけり

マンモスの白歯見しあと冬銀河

益荒男の眼寒鰯割りにけり

寒暮光出口開け放たれてをり

三夕<sup>さんせき</sup>をそびらにしたり鴨の尻

福岡

九竜庵 玄

どてら着て梁山泊の句座にをる

初空や明治二年の祖父のこと

めかんなぎ卑弥呼を真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>る初化粧

鶏旦や鳥居が一ツ門ニツ

# 銀河往来 高橋将夫

## || 精神の風景 ||

◇「かびれ」(大竹多可志主宰) 12月号より

秀句散策 小山孝

触れあふも蓮の浮葉の重ならず 高橋 将夫

蓮はスイレン科の多年草。インドなどの原産で、泥の中から抜き出て清浄な花を咲かすことから、仏教との関りも深く、寺院や池などにもよく植えられているが、根茎は蓮根で食用としてお馴染。蓮の葉は、大抵水から抜きん出て長い柄を伸ばすが、びったりと水面に葉を浮かべる時もあり、それが蓮の浮葉であるが、ここでは、すべての葉を水面に浮かせる水草など睡蓮を指しているようだ。それらの葉が、触れあうことはあっても重なることはないという発見、写生の良く効いた句であるが、さらに人間関係も同じで、干渉し過ぎず、お互いの領分を尊重しながら接する位が、気持ち良い関係で居られることなども示唆していると思われるのは、深読みに過ぎるだろうか。秀句は作者が意図するしないにかかわらず、時として象徴性の高いものになるものである。

◇「槐集」 観照

白ふくろふ精霊ことごとく見ゆる 近藤 喜子

白い鼻を見ていると、精霊たちが見えてくる。白鼻に私はそんな不思議さを感じる。「見ようと思えば見えてくる」点については「岡井省二俳句の軌跡」でふれた通り。

さうざうと日ののぼりくる冬の海 谷口佳世子  
この句を見ていると、まるで冬の海の波音がきこえてくるように楽しい。きつと「さーざう」の効果なのだろう。

水鳥を見つめてゐたる埴輪かな 近藤きくえ  
埴輪はどんな目をして水鳥を見ているのであろうか。幾多の時代の流れ、時の流れの中で。

鬼ゆず湯五体ほぐしてをりにけり 本多 俊子  
柚子湯につかっているだけの景であるが、「鬼ゆず」と「五体」がよく効いていて、まことに靈驗あらたかな湯につかっているような気がしてくる。

益 荒男の眼寒鰯割りにけり 岩月優美子  
寒鰯を割る男の眼光はさぞや鋭かっただろう。益荒男といわれたこの男、どんな男か一度会ってみたいくなる。

さんせき  
三夕をそびらにしたり鴨の尻 九竜庵 玄  
定家、寂蓮そして西行が詠んだ三つの「秋の夕暮」。それに背を向けて鴨の尻がある…俳諧。「わび、さびはいらない」世界。

まばたきもせぬ短日の特牛 黒田 咲子  
特牛は強健な牡牛。そんな牛にまばたきもせずに見られた。短日だけど、急ぐなよと。